



sapporo education and culture hall news
Raku



※1) xR: 現実世界において実際には存在しないものを表現・体験できる技術の総称(x Reality)。[x]部分にさまざまな文字が入り、AR(拡張現実)、VR(仮想現実)などがある。

※2) AR: 拡張現実 (Augmented Reality) と呼ばれ、現実世界に仮想の現実を重ねる技術のこと。

柔軟な視点から生まれた アイデアをコンテンツにする

—— クスミエリカさんの特集した a c t 36号では、t a b・y x R(※1) 技術を活用したシステム作りを手がけるシベリア興業さんと協働して、A R(※2) でクスミさんの作品を楽しめる仕掛けを作りました。この取り組みの意図はどのようなものでしたか？

教文 昨年度の a c t では「能面と花」「書」という伝統的なトピックを扱ったので、今年度はそこから少し離れた近未来を感じさせるものも紹介したいと考えていたときに、デジタルコラージュ作品を手がけるクスミエリカさんが頭に浮かびました。さらに、クスミさんの作品の特性を生かしたデジタルならではの見せ方と、a c t という媒体でできることを拡張させる取り組みとして A R は面白いかもしれないと思いました。それで t a b のカジタさんたちに相談して、シベリア興業さんを紹介していただきました。

カジタ A R 自体は特に新しい技術というわけではありませんが、紙媒体には情報の限界がどうしてもあるので、そこを拡張するという意味で A R を使うのは良いと思うし、事業を肅々と伝える従来の情報誌の堅いイメージと違ってエンターティメント性を出せるのも良いと思いました。教文に興味を持っていないくても「何か変わったことをやりはじめたぞ」と思ってもらえるという意味で、すごく良い取り組み

公演でのロビー展示ですが、これもアイデアから派生した取り組みだったんですね。**教文** 私たち職員の中にも、伝統芸能を公演として単発で紹介するだけではないことをやりたいという思いが、ずっとありました。和 culture は衣食住の中に根付いているもので、生活とともに伝統芸能があるのだということが伝わるような紹介の仕方をしていきたいと考えていたときに、ちょうどカジタさんの関わる「ELEVEN ZINZES」が発行するフリーペーパーで「浴衣で観劇」という特集をするというので、当館を撮影場所に使っていただいて。それがきっかけで相談したのが最初ですね。**カジタ** 和 culture を総体的に発信することで、最終的には公演の集客にもつながっていくようなことをしたいという感じの話からスタートした記憶があります。ちょうど6月に公演があるので、ホワイエ(ロビー)で何かやろうと思っていると聞いて。**教文** そのときはまだ「和 culture プロジェクト」という名前もついていなくて、何からやっていこうかという感じでした。ただ、ホワイエの空間活用については、以前から頭にありました。要は、伝統芸能の公演に足を運んでくれた人たちが、記念の思い出を写真として残したいと思ったときに、それまでは撮影できるスポットがなかったんです。公演自体の敷居が高いと感じている若い人たちを引き込むためにも、写真を拡散しなくなるようなコンテンツをホワイエで展開したいと考えていたので、それがうまく展示案と結びついた形です。実際にやってみたことで、従来の広告枠だけではない新しい情報発信の仕方に気づくことができ、こうやって自分たち

になったんじゃないかなと思います。

教文 「情報誌とはこういうものだ」という固定観念があると、どうしても堅いアウトプットになってしまうけれど、情報誌でもアイデア次第で面白いことはいろいろできると考えています。a c t 36号ではそこを実験的に試すことができ、その結果、情報誌の世界観を広げることもできたので良かったです。実は、和 culture プロジェクトや札幌文化芸術交流センター SCARTS で開催した能楽展示も、事業計画書には組み込まれていなかったにも関わらず、アイデアがどんどん広がって実現したという経緯があります。固定観念にとらわれず、柔軟な視点から生まれたアイデアを広げてコンテンツをつくっていくということは、a c t に限らず意外とこれまでもやってきたなと改めて思いました。

—— 和 culture プロジェクトが最初に形になったのは、2018年6月の「能楽なう」

「特集」

教文の未来

和 culture プロジェクトや a c t 36号×A R など新しい試みに挑戦してきた教文。これらの取り組みに関わるカジタシノブさん(t a b) と振り返りながら、地域密着型の文化施設として目指すべきものを探ります。

で広げていってもいいんだなと実感することができました。

カジタ その後2019年4月に能舞台を撮影できる機会ができて、この先和 culture プロジェクトを展開していく上でも素材はあった方が絶対いいからということ、その時点では何に使うか決まっていなかったけれど t a b・メンバーで一通り撮影しました。そうしたら、その年の7月に SCARTS で展示をできることが急遽決まって、撮影した素材がフル活用されました。

—— 2019年の「能楽なう」のプレイベントとして開催された『開かれる幽玄の世界／能楽展示』ですね。能面が宙に浮いているように見える展示や、3枚のスクリーンに投影された能面がゆっくりと動く映像展示など、ユニークな見せ方が印象的でした。

教文 館外での初となる展示で、札幌市図書・情報館と札幌文化芸術交流センター SCARTS と連携して開催できたことも良かったです。地元の能楽団体や能面作家さんからお借りしたものを用いて、地元の企業さんにもいろいろ協力してもらいながら新たな見せ方を工夫し、通常の古典芸能の展示とは一味違う創造的な空間をつくりあげることができたと思います。当初の目標を大きく上回る1350名の動員を記録するなど、手応えを感じる展示でした。

コロナ禍で必要とされる 発想の転換

—— 新型コロナウイルス感染症が拡大していた時期は主催事業を中止し、代わりに

プロフィール

カジタシノブ

合同会社tab代表。各種プロデュース・広報・制作を行っている。インタークロス・クリエイティブ・センターディレクター、イレブンナインゼネラルマネージャーなども並行して取り組んでいる。

教文

伝統芸能や演劇といった事業を軸としながらも、空間演出や和 culture プロジェクト、オンラインコンテンツなど、形にとらわれない柔軟な発想を活かした取り組みを積極的に展開。

日中は、自然光の中ほのかに光を発する素朴で力強い竹のオブジェと、艶やかでダイナミックな能面とフラワーアートによるビジュアルの競演。夜は、竹に施した繊細な模様から発光する華やかな灯りが、能面と生花による「夢幻」の世界をも浮かび上がらせる空間へ。

1階市民ロビーで開催された、教文和文化プロジェクトと「森の時間 SNOW HOKKAIDO 竹あかり」による初のコラボレーション「光と和の空間」。「新型コロナウイルス感染症の流行によって、多くの人がさまざまな影響のもと過ごさざるを得ないこんなときだからこそ、温かな光と癒しの空間を届けたい」。そのような願いを込めて実現した取り組みです。「下見に来たときに能の世界観が表現された3作品を見て、今回の竹あかりでは神々に捧げる祈りのイメージで、松明をデザインした作品をメインに構成しました」と話すのは、「森の時間 SNOW HOKKAIDO 竹あかり」代表の横山芳江さん。「展示とし

【団体プロフィール】
森の時間 SNOW HOKKAIDO
竹あかり

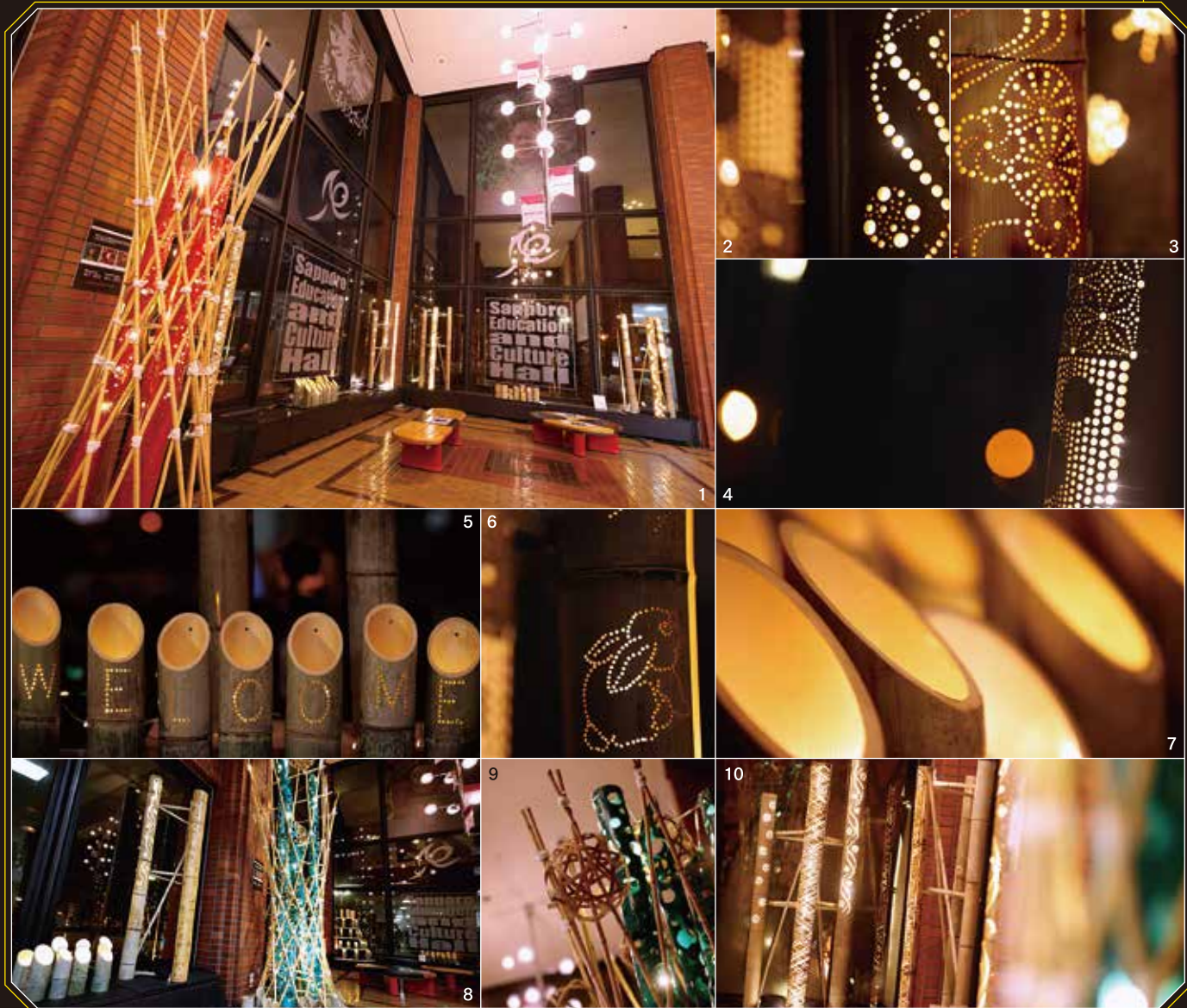
2011年の震災をきっかけに、復興支援やチャリティイベント等の活動をスタート。一方的な支援ではなく、人との縁をつなぐ「支縁」を大事にしながら、「明日また頑張れる!」という小さな希望へとつなぐ活動を継続中。

<https://www.snow-hokkaido.com/>

「日時」 2月9日(火)～4月11日(日)
「会場」 札幌市教育文化会館1階市民ロビー

竹あかり×教文和文化プロジェクト

「光と和の空間」



1)札幌での展示としての竹あかりは、2015年に九州の放置竹林から伐採した竹を用いた「CHIKAKEN」による竹あかりアートを知ったことがきっかけでスタート。以来さまざまな場所で竹あかりを開催し、2019年にはパリで開催された「JAPAN EXPO」で披露した。 2、3、4)つくり手は子育て中の女性が中心。作業に用いるドリルは、北海道の気候によって変化する竹の状態に合わせて刃を職人さんに相談し、専用に作ってもらった。 5)札幌市内の造園業者から破棄する門松を譲ってもらい、再利用している。 6、7)使用した竹は炭や堆肥にして土に還す。「生まれてきたものを最後まで活かす行為を通して、自分自身の存在の尊さにも気づいてほしい」という思いを込めています」と横山さん。 8、9、10)展示には約700本の竹を使用。切り出された竹は割れを防ぐために表面を焼き、浮いてきた油を拭くなど手を加えてから細工をしていく。

act 36号 × AR

クスミエリカさんのデジタルコラージュをAR化したact36号。AR作成を手がけたのは、xR技術の普及を目指し「身近なxR体験」をテーマに、さまざまな領域でこの技術を用いたシステムやアプリケーションの開発をしているシベリア興業さん。平面出力では味わえないクスミさんの作品世界を、ぜひ体験してみてください。



1 act36号裏面にある「教文情報誌Webアーカイブ」から、act各号の表紙に紛れ込んでいるQRコードを読み込む。

2 その状態で、スマホをact36号の表紙にかざす。

せんが、仮に今後新型コロナウイルスの流行が収束したとしても、配信がゼロになることはないと思います。劇場での上演と配信技術をうまく組み合わせたい新しい形がきつと出てくると思うので、長期的な視点から配信環境を整えていくことは必要な措置だと考えています。

カジタ 配信環境はあくまで道具として、それをどう使うかが問われると思います。代替手段としての映像配信にとどまると、面白くないですよ。これまでの流れで言うところ、ロビーやactといった媒体も道具ですよ。教文さんのすごいところは、公演事業ができない中、ロビーやactという道具の使い方について固定観念にとらわれず、これらの道具をどうひねくり回せば面白いことができるのかという視点があるところ。そういったアイデアや方法について固まっていない状態で相談されたりするんですが、そこから一緒にやれるののもとても楽しいですね(笑)。デジタルツールの価値については認知や再認識が一気に進みましたが、ではデジタルを知った上でアナログ、つまり実際の場所性みたいなものの価値をどう考えるのか。アナログとデジタルが融合した発信の仕方のもちろん出てくるでしょうけど、実際の場所性に対する捉え方が今より一歩進むとさらに面白くなってくると思います。

教文 映像配信技術がどんどん進んで、より広がっていくにつれて、実際にその場に足を運んでもらうことに対するハードルは上がるけれども、それでも生で見たいと思うてもらえるような手法は絶対あるはずです。実際に劇場へ足を運ぶ期待値も今まで以上に高くなると思いますし、ク

リエイターやアーティストにとっても、そういう期待値を高めていけるような工夫が必要になると思います。

カジタ 配信を見た上で「これを現地で見たい」と思わせられたらそれは勝ちですが、発信する側が「生で見るのが一番だから映像はあくまで劣化品」という視点だけでやっていたら、収束後にコロナ前の状況に戻ってしまう可能性が高いので、それだとつまらないですよ。場所性や舞台芸術に對して、今までは違う視点でどんな価値を見出し、どう提示し、今までそれが届いていなかった人たちにどう届けるのか。そのための実験は有意義だと思います。

実験しながら、
教文の新しい可能性を探る

——教文の未来について、これからどんなことをしていくべきと考えていますか？

教文 当館は2023年1月から2024年10月まで、施設の設備更新のため全館休館します。その間事業課としては、例えばどこかの施設をお借りして主催事業を行うことも不可能ではないと思うのですが、逆にactでのARのように、場所を問わずに面白いことができるようなものを作っておけるといいなと考えています。休館とコロナ禍での外出自粛は状況として似ている気がするので、その視点でコンテンツを考えてみるのも面白い。今のうちにたくさんアイデアを実験しておきたいですね。

カジタ 「教文の未来」ということで言うと、「札幌における教文」という視点でも考えないといけないと思います。札幌にはホールがいくつもあって、その中で教文は

伝統芸能や短編演劇祭、コミュニティダンスなどの特色がある。そういった特色をより先鋭化させつつ、実験精神が加わることで特色がより際立ってくると、札幌に教文があることの意味がより強まっていく気がします。また、普及ということを考えたとき、イベントを開催していないときに何をもちたすことができるのか、例えばロビーなどで常態的に来た人を楽しませる仕掛けができるかが重要になってくるのではないのでしょうか。

教文 そうですね。当初2020年度の事業として、ロビーの空間をうまく使って場所としての価値を拡張させるような取り組みを考えていました。コロナのことがあって計画変更を余儀なくされながらも、一部は実際に実現できたので良かったですし、こういう取り組みは大事だと考えています。

カジタ 教文は場所性に連なる機能はありますが、仮に場所がなくなったらとしたらどんな機能が残るのだろうかと考えたら、今後、場所性とは紐付かない機能についても考える必要があると思います。例えば和 cultura プロジェクトのように、何らかの文化を担っているのが教文だよねということになると面白い。定例化した事業だけではなく「プロジェクト」という形で始めて、事業に関する実験も増やしていけるといいのではないのでしょうか。デジタルコンテンツも含めて、実験しながら新しい可能性を探る活動が教文の個性となっていて、いろいろな道を切り拓いていけるような気がしています。面白いアイデアを具現化させる試みに、もし声をかけてもらえたなら、ぜひ一緒に楽しみたいです。



和文文化巡り

第7回 | USAGIYA 札幌パセオ店

伝統芸能とともに日本の文化の魅力を気軽に体感してもらう「和文文化プロジェクト」。
連載7回目は、USAGIYA札幌パセオ店をご紹介します。



USAGIYA 札幌パセオ店

札幌市北区北6条西2丁目
パセオセンター B1F
tel.011-213-5406
営業時間/10:00~21:00 ※パセオに準ずる
※ポトリングは、道内外の直営店のほか全国
にパートナースタンドが拡大中。詳細は
公式サイトからご覧ください。
<https://usagiya-tea.jp/>

会話と笑顔を生む

日本茶の定額制ポトリング

昭和20年創業の旭川のお茶店吉川園を引き継ぎ、2014年に「日本茶との新しい付き合い方をデザインするブランド」として創業したUSAGIYA。そのコンセプトを象徴するのが、30日間15種類のお茶を何度でも楽しめる定額制のポトリングシステムです。「お茶は会話の真ん中にある」という思いから、「若い世代の方々にも気軽に楽しんでもらえて、かつ頻繁にお店へ足を運んでいただくことで、スタッフとお客さんの間に会話が生まれるようなサービス」と発案され、多いときで1日500杯以上が出る人気サービスに。ポトリングを通じて毎日顔を合わせるせいか、受け渡しのときはお客さんがみんな笑顔になっているのも印象的。ポトルとティーバッグで手軽に淹れ、そのまま飲むというスタイルなので、時間とともに味や香り、色の変化を楽しめるのも嬉しいポイントです。「茶葉で淹れたお茶の美味しさを、より身近に感じてもらえる」と嬉しいですね。と店長の葛西さん。お茶は玉露などの深い香りと味わいを楽しめるオリジナルブレンドから、ミントや柚子とのブレンド、米やごぼうから作るノンカフェインティーまで全てティーバッグで提供しているので、自宅でもマグカップ等で気軽に楽しんでください。

SAPPORO ENGEKI no WA

能登 英輔さんから指名

【プロフィール】

福地 美乃

Mino Fukuchi

1980年札幌生まれ。高校で演劇を始める。卒業後、札幌大谷短期大学音楽科に進学、同時期にyhsに所属。yhsの公演の他、客演も精力的に行っていたが、2015年から妊娠・出産・育児のため活動をセーブ中。



演劇のわ

さっぽろ

yhs

福地 美乃

次に舞台に立つ日のために、
できることはたくさんあると思っています。

福地美乃さんは、yhs主宰の南参さん曰く「昔は飛び道具、最近是要として」活躍。役者の能登英輔さんと結婚・出産後は活動セーブ中の彼女が今考えていることは？

福地さんは藻岩高校で2つ上に南参さん、その下に能登さん、同期が小林エレキさんと野村大さんという面々に囲まれて演劇を始め、卒業後はyhsに入ってから今年で23年目です。2015年に出産後、舞台から離れる中で葛藤はありましたか？

不器用なせいか子育てと芝居を同時にするのは無理かもしれないと思い、少しの間お休みさせてもらうことに決めたのですが、葛藤はありました。私は役者・能登英輔のファンで、誰よりも応援したいし、彼の舞台を見ていたい。だけど同時にいろいろな気持ちがいっぱいあって、能登君が舞台に帰ることを希望していることをありがたく思いつつ、喧嘩したりやさぐれたりという時期はありました。

札幌演劇シーズン2017のyhs『忘れたいのに思い出せない』で、久々に舞台に立ちます。

子どもを母に預けて稽古へ行くとき、最初は「ごめんね」と思っただけです。ただ母も子ども4人を育てながらオペラの舞台に立ち続けてきた人なので、「後ろめたく思うのではなくて、お母さんはこれを一生懸命やっているからな」というのでいいんじゃない」と言ってくれて。それからは「頑張っ

てくるわ」という感じで行くようにしました。いざ稽古が始まるともう楽しくて。子どもができたせいか、役の心情に対する捉え方が変化した部分もあって興味深かったです。

2020年には『歯並びのきれいな女の子』のオンラインリーディングがありました。この作品と『忘れたいのに』が2010年初演で、どちらも自分に新しい世界をくれた、いつまでもチャレンジ続けたい大切な作品です。『歯並び』は初めてオーディションを受けて大きな役をもらって、演技の上でも手応えを感じた作品でもあるので、初演メンバーでのリーディングの話をいただいたときは嬉しかったです。オンライン上で完結するつくり方を経験できたことも面白かったですね。

今はどんなことを考えていますか？
以前は「このままダメになるかも」と不安になることもありましたが、2017年に舞台に立てたこと、昨年のリーディングに反響があったことでエネルギーをいただけて、もう少し自分を信じて次に舞台に立てる日のためにできることをしようと思えるようになりました。人の良い演技を見るとこんなに興奮するんだと今更ながらにわかって、映画もよく見えています。一人芝居にも挑戦したいですね。南参君に相談したら「演出ならやるよ」と言ってくれたので、どなたかぜひ脚本を書いてください！